

画像情報と政治

——九六年珠洲市長選挙を手掛かりに——

茨木 正治

- 一 問題の所在
- 二 研究動向
- 三 九六年珠洲市長選挙——写真による再構成——
 - (1) 珠洲市長選挙の概略
 - (2) 分析方法
 - (3) 分析結果と考察
- 四 結論と課題

一 問題の所在

本稿は、画像に写し出される政治過程を読み取る作業を通じて、当該政治過程を再構成してそこに描かれる現実を明らかにしようとするものである。従来の考察において、政治漫画からみた選挙は基底となる事項や争点とそれ以外の争点が重複して描かれることを明らかにした。画像が主として戯画化の過程において抽象的な性格を強く持つのに対して、現実をより具体的な次元で切り取る写真が持つ、政治の文脈における意味に焦点をあてて言及する。

記号や象徴という点で、読み手に多様な解釈をもたせる画像と写真は共通点をもつ。他方で、写真は報道の場合にはより具体的で明快な内容を持つ必要に迫られる。多様な解釈を一定の方向に収斂させるために、写真は「枠付け」と「見出し文字」、およびステレオタイプのな「演出」など様々な手法が用いられる。これらの手法が既存の価値体系と連動し、一定の方向に読み手を導くとすれば、その手続きの定型性のゆえに政治の儀礼的性格を描きだすことに近づく(Edelman, 1964, 1995) (吉見、一九九四)。選挙についていえば、立候補表明—支持集団の顕在化—選挙日程の決定—選挙運動—投票・開票—結果判明等々の流れのなかに個別的・時局的要因が介在して、既存の秩序の確認としての儀礼が成立する。以下では、写真とマス・メディアおよび政治学における研究の一端を紹介し、画像の解釈とその背景をも含む総合的な分析の意義を裏付け、次に画像として新聞写真をとりあげ、その画像解釈をもとにして「やりなおし選挙」の再構成を試みる。

二 研究動向

メディアにおける「イメージ」と表現される「画像」の解釈をめぐって、社会史や美術史で定式化された「図像記述学」(iconography)から「図像解釈学」(総合的直観による象徴的価値の世界観の表明)(iconology)への展開のほか、認知科学や精神分析・シンボル理論などコミュニケーション論の「情報的分析」がなされている。「図像解釈学」への展開については、芸術と視覚表象の心理を考察したゴンブリッチ(Gombrich)がいる。彼は、スキーマ(シエマ)認知の伝統を用いて、文化が視覚表象を規定し、学習された文化によって表象の読み方が規定されるとした(Gombrich, 1960)。彼はその後、画像と文字との文化的なつながりによって視覚情報が構成されていることを提起し、そのつながりをパース(Peirce)の記号論に求めていく。ここにおいて、いわゆる「画像は真実を表す」という一種のリアリズムに対する立場を鮮明にしたといえる。

また、人類学と社会学においても、視覚情報のリアリズムへの疑義が提起されていた。ソル・ワース (Sol Worth)、ラリー・グロス (Larry Gross) らの登場によって一九六〇年代から七〇年代にかけて活性化した、視覚コミュニケーションの人類学を辿ったメサリスは、表象形式が文化に規定されることについて、少なくとも画像解釈や理解のレベルにおいては妥当である（その認識や理解のもとになる価値意識においてはわからないが）と述べている (Mesaris, 1994, pp.60-70)。

写真に関していえば、「写真を用いた分析」、「写真の構造的分析」、「写真とジャーナリズム」の三分野に最近の研究を分けることができる。

「写真を用いた分析」では、容疑者の同定、目撃証言におけるコンピュータ写真の利用の研究 (Lee, 1998) や元英国皇太子妃の事故死以後の写真によるイメージを、記号論によって分析する研究 (Brauer and Shields, 1999) がある。後者の研究は、扇情主義的な性格の強い「タブロイドジャーナリズム」の中の著作と雑誌の特集を素材にして、有名性の構成を明らかにした。この論文では、文章と写真の相互作用からどのような象徴体系を組み合わせて有名像の意味を生成し権威づけるかをみている。さらに、写真の内容の安定性と意義を決めるのに、「語りの情報源」（ここでは扇情主義的な著作と写真）の伝達方法が大きく関与するとしている。これらの研究は、特定の事例を分析対象として、どのような内容がどういったシンボルによって定義づけられるかを述べたものである。ここから、ベトナム反戦運動報道の写真がニュース報道として「反乱」と意味付けられる過程を追った研究 (Holloran, et al, 1970) や、都市の暴動の報道が一枚の写真によって「テロ行動」と定義されて、後の騒動報道の雛型になっていくとした研究 (Hansen and Murdock, 1985) などが含まれる。

「写真の構造的分析」では、シンボルと記号体系全体との関係を考慮し、包括的かつ詳細な読みを画像に反映することを試みたところに特徴がある。前述のシンボル利用があくまでも写真を手段として目的とする事象の解析に主眼

が置かれていたのに対して、以下叙述する研究は、記号体系全体を視野にいたした当該現象、組織、社会の「構造」を把握することに比重が置かれている。こうした包括性を画像に取り入れようとして記号論の概念や技術を援用した研究(Hatley, 1982, Fisk, 1991)や、特定の画像の意味の考察というシンボル研究から出発して画像一般の文法の意味を考察する研究(Tuchman, 1978, Turner, 1988)、テレビ画像の中の記号の分析からそれらの要約と社会的意味とを「作法」としてまとめた研究(Berger, 1991)などがある。加えて、歴史史料としての写真の意味を考察する研究(Ellis, 1998) (Brennen, 1998) (McDaniel, 1998)、事故報道の写真分析(Bishop, 1999)などがある。この中のマクダニエルの研究は、第2次世界大戦のフォトジャーナリズムとポルノグラフィーとの類似点を見いだしている。戦時中の写真雑誌「ライフ」の作品から、戦争報道と写真が愛国主義的リビドーの喚起を指摘している。エリスの研究では、一九三〇年代から一九四〇年代の労働者階級のアイデンティティーの抑圧をドキュメント写真の検証から明らかにしている。特に女性労働者の黙従が増幅されているとする。中産階級にとつての労働階級のイメージは一次元的シンボルであったのが解体されていたにもかかわらず、当該階級の「不平等」には視点があてられなかった(若干の例外を除いて)と述べている。これは、ジェンダーに内在するステロタイプの存在を指摘しているとみられる。

ビショップの研究は、前述のプラウアーらの研究と同じ英国元皇太子妃の事故死報道を対象として、主要メディアが自らとタブロイド紙との間のジャーナリズム「倫理」の線引きを改めて行なおうとしたことを、写真を含む報道によって論じたものである。彼はこの境界線が近年曖昧になったという認識に立つ。その根拠として、読者の「大衆的な欲求の拡大が収容メディアにも浸透してきたことと、それゆえにタブロイド的な手法を主要メディアが採用したことをあげる。続けて彼は、報道のトーンおよびテーマの分析を、日刊紙、ニュース雑誌、民放、ケーブルTVとタブロイドとの報道の比較を通じたテキスト分析によって行ない、そこから主流ジャーナリストらの「専門(選民)意識」(防御の姿勢)過程を明確化しようとした。彼の研究にとって主眼となるのは、メディア報道統体としての分析であ

り、新聞写真はその一環にすぎないが、情報の「送り手」のフレーム（判断枠組み）（写真ならばフォト・フレーム／バリュー）についての考察にまで言及している点に特色がある。

「写真とジャーナリズム」の研究は、ニュース選択が客観的なものよりも編集者の主観的なものによって決定されることを調査とフィールドワークによって明らかにした、「ゲートキーパー研究」（White, 1956）を先達としてもっている。ここから、ニュースの素材を採集する「現場」の記者・カメラマンの認識の仕方に枠付けが存在することを示した研究（Hackett, 1985）が生じた。この研究は、マス・メディアは社会の出来事があるがままに映し出すという「現実の鏡」説を無批判に受け入れる「素朴なりアリズム」が「現場」の人間の中にあり、それがあつた種の枠を写真に与えてしまふことを指摘している。また、先に述べた歴史研究（Brennen, 1998）のほかに報道写真の編集者の立場の考察（Russell and Wanta, 1998）「写真家とジャーナリストとの関係から考察される写真の社会性との関連」（Smith and Woodward, 1999）「民族運動と報道写真の関連から意味付けの差異を述べる研究」（Edge, 1999）「一九九六年のアメリカ大統領選挙の報道写真の内容分析にみられるバイアスの問題を考察する研究」（Waldman and Devitt, 1998）などがある。この中で、写真を扱う「主体」に着目したのが、ブレネン、ルシアル、スミスの研究である。ブレネンは、一九三〇年代から四〇年代の新聞の写真家が写真そのものよりも軽視されていたことを示している。彼によれば、これはジャーナリズム史が制度や内容に偏っていたことによるものであるとし、史的唯物論にたつて生産手段と人間との関連を伝えることの必要性を説く。ルシアルの研究では、前項規模の調査に基づいて、報道写真編集者の立場が技術の進歩と変化に対応しているとして、彼らの養成にもこのような視点を取り入れる必要を述べている。デジタル化に伴う写真編集と新聞のその他の編集との類似点が登場することの指摘は興味深い。これらには、写真の価値判断や枠組み（フォト・バリュー、フレーム）が写真そのものだけでなく写真家や編集者をも含んだ「組織的」なものであり、それゆえ「総合的」な解釈が必要となるゆえんにもなることを示唆していると考えられる。

政治学的対象と写真との関係を論じた研究では、エッジのそれは、報道写真の読み取りないし掲載新聞社のフレームが当該問題の定義づけと関わることを述べている。北アイルランドの殺傷事件を扱ったこの研究では、全国紙の写真はヒューマニズムを前面に押し出し、殺害の「脱色化」「個人化」「脱文脈化」がなされていると述べる。こうした読み取りが読者にも相応するか否かという問題には明確には答えてはいないが、争点の細分化や多様化が写真のメディア・フレームとされてしまうことに注目すべきである。

クリントンとドールについての新聞写真の内容分析を選挙戦終盤の約二カ月間実施したウォールドマンらの研究では、クリントンの登場した写真はドールの半分以下であったが、扱いは逆に少しの優遇がみられたとしている。好意度が自由主義的な性格をこの分析においてはもっていることから、自由主義が戦略上のバイアスをつくっていると結論づけた。総じて、コミュニケーションにおける写真の分析には「批判学派」のアプローチが目立った。

三 珠洲市長選挙——写真による再構成——

(1) 珠洲市長選挙の概略

一九九三年四月に行なわれた石川県珠洲市長選挙で、選挙に不正があったとして落選した候補の支持者らが県選管に選挙無効を要求していた訴訟の上告審判決が一九九六年五月三一日にあり、最高裁は選挙無効の第一審判決を支持し県選管の上告を棄却した。判決では、不在者投票の審査、開票作業での投票数の多さ、点検作業の杜撰さを指摘した。これを受けて、原発推進派の貝蔵治(かいぞ おさむ)氏と反対派の榎田準一郎(かしだ じゅんいちろう)氏の二名が立候補し七月一四日の投票の結果、貝蔵氏九三五六票、榎田氏七四九八票、無効一三三、不受理六となり、推進派の貝蔵氏が初当選した(表—1)。

(2) 分析方法

（表－１）珠洲市長選挙の経緯

- 96・5・31 93年4月の珠洲市長選挙は無効 最高裁、県選管の上告棄却
6・3 樫田準一郎氏出馬表明 自民党珠洲支部林幹人氏擁立決定
4 林氏市政から引退表明 貝蔵治氏立候補表明
5 7月7日告示、14日投開票を市選管が決定
9 樫田陣営事務所開き
11 林前市長の離任式 田畑良幸助役、貝蔵氏支援を発言
14 87年の統一地方選挙の不在者投票の記録集のページ切り取られていることが判明
珠洲市議会開会（～24）
20 市職員組合が貝蔵氏推薦
24 市議会、投票形式を「自書式」に決める
25 立候補者説明会
27 田畑助役を樫田氏後援会が刑事告発
7・7 告示
14 投開票 貝蔵氏当選 田畑氏逮捕

一九九六年五月三十一日（統合版は六月一日）より同年七月三十一日までの「朝日新聞」、「読売新聞」、「毎日新聞」、「北陸中日新聞」、「北國新聞」（以下、それぞれ、A、Y、M、Hc、Hk、と略記）に掲載された写真と記事の中で、珠洲市長選挙に関連するものを対象とした。これら記事と写真は、新聞内の情報量をそれぞれコラムセンチで測定した。

次に、写真については、時系列的に当該選挙にトピックとなりうるものと選挙一般における時系列的推移（佐々木、一九九八、武重、一九九七）とを組合せ、分類した。この写真の分析にあたっては、K・パークの「劇学」（Burke 1945）概念と写真表現の技法（渡辺、一九六八）を中心に図像学の知見（E・パノフスキー、一九七一）、（E. Gombrich, 1991）をもとにした。さらに、政治社会学学的接近として、構図と人物の組み合わせから象徴的リーダーの行動の演出の所在と展開を読み取った「坂本の行幸研究」（とくに、坂本、一九八九）を配慮して「二」で概観した写真研究の「シンボル」性の探究を図った。

(3) 分析結果と考察

1 最高裁判決

「やりなおし選挙」の発端は、五月三十一日の最高裁の上告

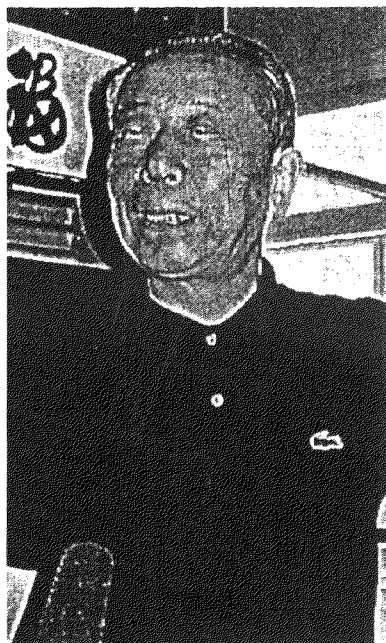
棄却の判決であった。この出来事を扱った写真は、五紙合わせて一四枚(四五三コラムセンチ)であった。具体的には、「林幹人元市長の表情」、「樫田準一郎氏及び原告団の会見と表情」、「選管の状況」、「その他」と分けることができ、上記二項目で一〇枚を占める。その内九枚が「フロントページ」に掲載されていた。「林氏」と「樫田氏」の写真は、対照・対比を意図して構成されている。ここから、肖像写真に近い形態の写真であっても、「背景」や「編集」といった写真の諸技法に通ずる、「送り手」の意図を読み取れる。一般に、裁判の判決に関するニュースならば、原告と被告の集団の代表者(ここでは弁護団と被告の県選管)がクローズ・アップされる。今回の場合には、前回の選挙の立候補者を前面に出すことによって、裁判内容の詳細よりも、勝敗と再選挙の開始を表わそうとしたことに、「やりなおし選挙」の「判決」に関連する写真の「意図」がみられる。言い換えれば、「判決」とっては、「象徴的リーダー」の肖像写真によって始めて、写真の「意図」が明らかになるのである。

この「背景」を理解させるものとして、各写真について「見出し」がある。「林元市長」については、「市長職を失った」(Hc)、「硬い／ムツとした表情」(M)、「気落ちした」(Y)、「残念だと語る／厳しい表情」(Hk)などと七枚中六枚に、裁判に破れた「暗」の部分強調する「見出し」が付けられている。一方、「樫田氏」には、「喜びをみしめる」(Hc)、「意欲をみせる」(M)、「要請あれば立ち上がる」(Hk)と、前途に「明るさ」を見せる「見出し」を写真につけている。これらの中から抽出したのが、(図一)の写真である。ここにおいて、写真からただちに樫田、林両氏の心情を読取ることは難しい。彼らは、この時点では「前回の選挙の候補者——勝者と敗者——」であるにすぎず、にもかかわらず「判決」および原発設置問題の当事者とみなされる「象徴的リーダー」であることが「読める」のは、この写真に対応する記事の見出し(「珠洲市長選は無効」、「原発推進の林市長失職」)および上述した写真見出しと当該写真(図一)との「モニタージュ」(画面ないし複数の写真を組合せ要約や衝撃の効果をj得る手法)の結果であると考えられる。

（図－１）'96. 5 .31 北國新聞夕刊



最高裁判決に「残念だ」と語る林氏
＝金沢市の石川厚生年金会館



無効判決に「要請があれば次の選挙に立ち上がる」と語る
榎田氏＝珠洲氏飯田町の自宅

2 出馬の顚末

最高裁の上告棄却を受けて、立候補者の選出、市選管による選挙日程（七月七日告示、一四日投開票）の決定と「選挙」儀礼が進行する。六月四日、林元市長の不出馬と貝蔵治市総務課長の立候補が表明された。上告棄却のショックが予想された林氏は、圧力団体や政党の指示表明にもかかわらず明確な意思表示を「判決」後行なわず、四日貝蔵氏への「交替劇」となった。この経緯を写真によって再構成すると、支持基盤の出馬要請↓出馬要請の手順をとっている。「林・貝蔵」側の写真が五〇％ほど多い。この点では「地方紙」二紙に差異はない。短期間の情勢の変化には、「地方版」はどうしても「地方紙」に遅れをとってしまう傾向がこの「交替劇」においても見られた。（表―２）から明らかのように、「政党や圧力団体からの動き」と「立候補予定者の動

(表一2) 「出馬の顛末」に関する写真の枚数

		Hc	Hk	A	M	Y	計
政党・圧力団体の検討	林	5	5	1	2	0	18
	榎田	7	7	1	3	0	
支持政党・団体との交渉	林	0	1	1	0	0	8
	榎田	3	4	1	0	0	
出馬(辞退)表明	林	5	3	1	2	1	1.9
	榎田	8	4	2	3	2	
そ の 他		0	1	1	1	1	4
計		18	16	5	7	3	49

（図-2）'96.6.5 北陸中日新聞朝刊



記者会見の後、握手を交わす貝蔵氏（左から2人目）と林氏＝珠洲商工会議所で

き」が相互作用であることがわかるには、「地方紙」の情報量がものを言うのである。

（図-2）は、林・貝蔵両氏の「交替劇」の写真である。対立候補の榎田氏は三日に既に出馬を表明しており、支持団体との接触をはかる姿が写し出されていた。これに対して上告棄却以後、林氏は姿を人前に見せずこの日（四日）の珠洲商工会議所における写真が突然の登場となった。失意に暮れた「棄却・失職」から一転して、笑顔による貝蔵氏との握手となった。貝蔵・林の両主役だけでなく、やや「ロング・ショット」（対象物から離れて広い情景を画面におさめる手法。物語的な視覚効果を持つ）の色彩をもたせて、「多くの支持者のもとでの禅譲」劇の印象を持たせている写真である。それとともに、「原発推進路線の継承」（貝蔵氏は電源立地対策の初代課長）がスムーズに行なわれたことを、内（自民党珠洲市支部——左端に上田県議——）と外（自民党以外の支持団体）に示すための林氏の「笑顔」であった。

このような「セッティング」(演出)の技法から、林・貝蔵・上田の三氏が同じ大きさで前景に登場していることも説明しうる。すなわち、貝蔵氏は林氏の後継者に足る存在であることをこの「儀式」の写真は示すとともに、支持団体である自民党県議とも同等であることを(他の支持団体と差別化をはかることを)図らずも示したのである。また、病気を理由の林氏の政界引退も、この「儀式」を余儀なくした要因であろうと考えられる。元来、政治家は病気でいることを極力隠す傾向がある(三輪 一九九六)。政治家自身の政界での影響力だけでなく、彼を支持する組織・団体への影響を恐れるからである。今回の場合には、そうでなくても「上告棄却」が「逆風」として原発支持派に吹いてくることが大いに予想されていた。それゆえ、病気による元市長の不出馬というマイナスイメージを払拭する仕掛けが支持派には求められた。その結果が「禅譲」スタイルであり、危機意識を高め連帯感を形成させるべく、「王権」を維持しようとしたのである。

3 選管の対応

上告が棄却された後の石川県および珠洲市の選管の対応を写し出す諸々の写真は、最高裁判決という出来事を当事者である選管だけでなく、メディアがどのようにに対応したか(どのような価値基準にそってニュースとして再構成したか)を物語っている。特定の選挙に関しての結果判定が白紙に返っただけであり、選挙管理委員会の管理責任はどうあるべきかという一般的な問題への焦点化を回避すべく記事・写真の方向づけがなされた。このような焦点の設定(ないし盲点の発生)は、「判決」以後の選管の対応をテーマとする写真がほとんど選挙の投票業務の「公正」なる遂行を写していたことをみれば明らかである。今回の選挙の「話題」の一つに「公正なる選挙」があることは「出直し／やりなおし選挙」という言葉が象徴している。それゆえ、「選管の対応」について報道量が多くなるとはいえ、その中でも個々の具体的な対応(不在者投票への注視、珠洲市選管ならびに市役所への指導など)に「選管の対応」が限定され、構造上の問題への展開が見られなかったのである。

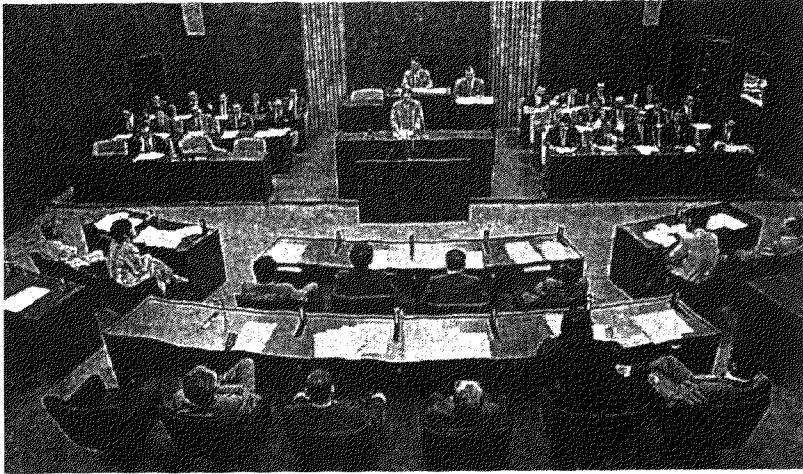
（表－３）「選管の対応」に関する写真の枚数

	Hc	Hk	A	M	Y	計
判決の影響	1	1	0	1	2	5
対応の協議	4	4	2	3	0	13
指導・指示	2	1	1	2	1	7
事務作業	1	6	2	2	4	15
不在者投票	2	1	0	0	1	4
その他	2	3	1	0	0	6
計	12	16	6	8	8	50

（表－３）は、県・珠洲市選管の対応をテーマにした写真の枚数である。これによると、構造や組織の問題として内省的にこのテーマをとりあげた写真は見当らなかった。強いてあげれば、「その他」にある「（県選管委員長の）県議会での答弁」と「前回の投票の回顧」の項目の三枚であり、全体（五〇枚）のうちの六％にすぎない。これに対して、現在ないし将来の事務処理の十分な遂行を描いた「個々の争点・責任」の項目に該当する写真は、「選挙事務作業」と「（判決の）対応の協議」をふくめて二〇枚にも及び全体の四割を占める。また、責任追及についても、圧力団体による責任者の引責要望書提出（6.18. M）のみで、「県議会の答弁」は結局は選管の「今後の」決意表明に終始した（6.20. Hc）。

写真は個別具体化の特徴をもった記号（名取一九五八）である。抽象的な概念を「意図」として持っていて、被写体の個性性に読み手の関心や印象が制約される。特に、人物に焦点を充てた写真は、人が関与する問題を読み取る際に、当人の人格・個

(図-3) '96.6.20 北陸中日新聞朝刊



最高裁判決をめぐり一般質問があった珠州市6月定例議会

性・社会的環境などからの影響を免れない。答弁する選管委員長の写真は、選管の責任を委員長個人に「還元」(ないし「私化」(privatisation))させてしまう印象を読者に与える。それゆえ、決意表明による「個人の」名譽回復の機会を与えることが選管全体の名譽回復として意味をもつことになる。その結果、(図-3)のように珠州市議会の模様を併記することによって、個別化・私化を避けようとした。ところが、期を同じくして珠州市議会では、助役が前市長の離任式場で市長支持を表明したことをきっかけに一時紛糾した。それが、前述の県議会での選管委員長と県議とのやりとりと組み合わせると、「珠州市長戦の無効」にまで抽象化が進み、選管自体の引責では收拾がつかない状態になった。新聞投書もこの「個別化」への傾向を促進させた。県議会での答弁以後に選管委員長の引責について言及した投書はわずか一通掲載されただけであった(6.25. Hk M)。選挙の厳正な遂行への要望がHcの一つ、Hkに三つ(しかも「珠州市長選特集」(6.16. Hk M)に集中している)登場するのは、選管の構造改革よりも切迫した再選挙をどのように「厳正に」執り行うかに主眼が置かれた結果である。

4 選挙運動、圧力団体・政党の支持

これらの項目をテーマとする写真は、依然までの項目と異なって、紋切型の内容をもつものが多い。鉢巻きをした運動員が氣勢をあげたり、宣伝カーからおりて街頭で「市民」と交流する候補者を描いたりするようなステレオタイプの色彩が強い写真は、活字情報やレイアウト・写真内の構図、「フレーミング」（対象をファインダーの枠でカットすることによって、画面の内外の空間の交流が効果的になるようにする技法）などの技法と組み合わせられて一定の「意図」を読み手に伝えようとする。選挙全体の儀礼行動からみれば、儀式が最高潮にむけて展開していく箇所でもあり、「肅々と」「型通りに」進行する。

「選挙運動」をテーマにした写真は、時系列的に四つの時期に分けることができる。①出馬まで、②出馬から告示まで（六月六日～七月六日）、③告示期間（七月七日～七月一三日）、④投票（七月一四日）。これらの時期に特徴的なステレオタイプの表現をもとに儀礼行動を叙述すると次のようになる。（このうち、①については2「出馬の顛末」で言及した。）

②では、決意や政策表明を立候補予定者が行い、事務所を解説して氣勢を上げ、③で正式に立候補後、出陣式の儀式を経て選挙に臨む。④その結果、雌雄が決して、胴上げや（新市長としての）抱負を披露し、かたや敗戦の弁を諄々と語る。

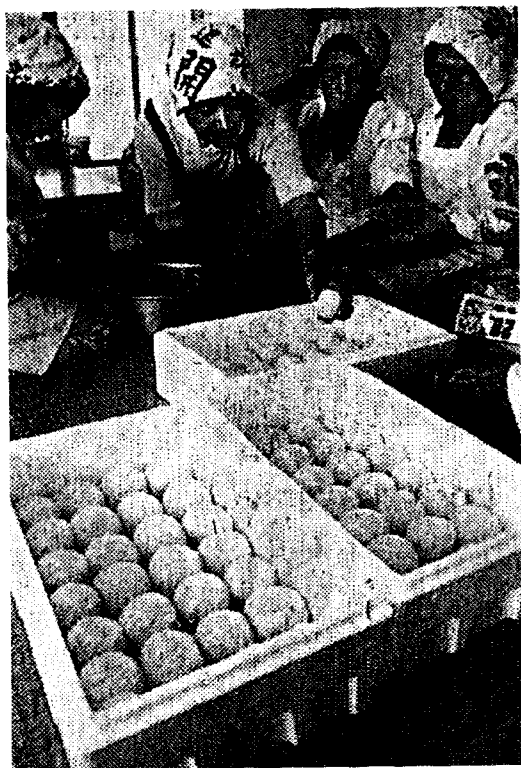
①から④を通じて特徴として示される点は、女性の役割と貝蔵・樫田両陣営の相互の応酬である。②と③を中心に女性がどのように写されているかをみると、第一に、「選挙Ⅱ男の戦いの場」という価値意識に沿った役割を演じていることがわかる。「女性部隊」による女性票の獲得を意図した選挙活動（図―4）や「裏方おかみ」の見出しによって男性の活動の補助をする役割を写し出している（図―5）。女性が運動員になることと女性票の獲得とは直接関係ない。ところが、同性のゆえの理解しやすさが「男の世界の特異な存在」ないし「そのなかで献身的に働く存在」としての女性像によってより強められる。

(図一4) '96.7.11 北國新聞夕刊



女性票の取り込みに奮戦する女性部隊＝珠洲市内

（図－５）'96. 7. 8 読売新聞朝刊



おにぎり

「お願いしまーす」。選挙カーから届く声は、すでにかれた。裏方で支えるおかみさんたちは、運動員の腹具合に心配り。

(図-6) '96.6.12 北陸中日新聞夕刊

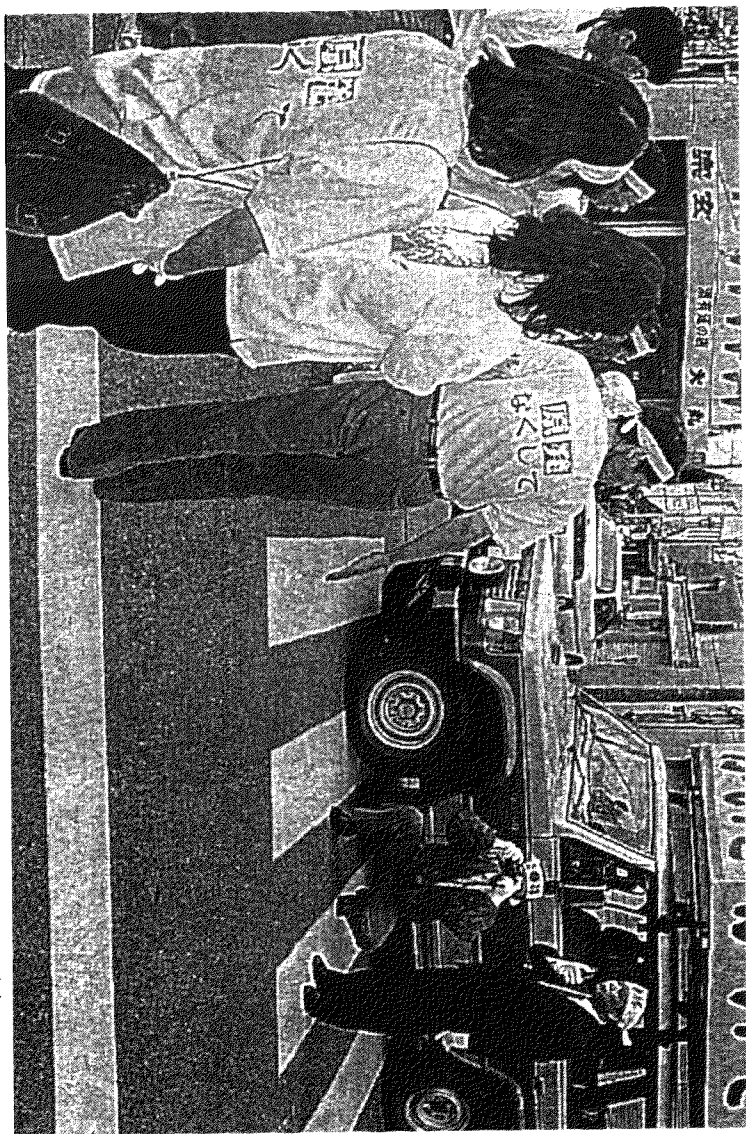


おばちゃんたちと世間話に花咲かせる榎田氏＝珠州市飯田町で

第二に、「女性」家庭」のイメージの流布である。「女性支持者とのふれあい」(図-6)では、候補者が地元の「家庭」にも十分気を配っている——丹念な選挙活動——をシンボライズするのに役立っている。この「家庭」イメージは「おばちゃん」という見出しのことばの対象である中年以上の女性に付加されていることから明らかである。このような地域の「家庭(的な接触)」「密接なつながり」からは、「過疎問題」や「草の根原発」といった主張や争点は関連づけられないこともないが、投票の不着や選挙違反というような「出直し」/やりなおし選挙」といったシンボルは想起しにくく、単なる「地元の選挙」という総称が読み手に伝えられる。それゆえ、従前のステレオタイプと連動しやすい写真ということができる。

これに対して、貝蔵・榎田両候補の「相互牽制・相互応酬」というテーマにふくまれる写真は、原発賛成・反対といった争点を背景にしたトピック性と、雌雄を決する対決姿勢(選挙「戦い」イメージ)との両方を喚起させる。とくに後者は、前述した投票開票にいたる「一カ月半の儀礼」を構成するシンボルであり、「儀礼性」と「特殊性」とが組み合わさった写真群であるといえる(図-7)(図-8)。

（図 7）'96. 7. 12 北陸中日新聞夕刊



貝蔵陣営の街頭演説（右）に、「原発なくして」のTシャツ姿の榎田陣営側が応酬＝珠州市飯田町で

(図-8) '96.7.8 北陸中日新聞朝刊



貝蔵候補の出陣式会場わきをかすめる榎田候補の選挙カー＝珠洲市飯田町で

たとえば、（図―7）では、一見すると街頭演説をする候補者と聴衆というお決まりの構図のように見える。しかし、よくみると、原発推進派の貝蔵候補側（車に「かいぞ」の看板あり）の演説を、反対派（「原発なくして」のロゴのはいつたTシャツを着ている）が聴くという妙な構図ができています。同日（七月一二日）の模様を写したHcの写真では、両陣営が互いに写真を撮り合っている姿が写されている。これらから、両陣営の鉢合わせによる選挙運動の過熱ぶりが窺え、当該選挙の対立の大きさを暗に示している。

（図―8）では、単なる応援風景のなかに、演説カーが偶然「ニアミス」したような意味をもたせた「モンタージュ」技法による動きを採用している。狭い地域の選挙である（だからこそ「しこりが残る」と懸念される）ことを物語っているとともに、七日が告示日で前掲の貝蔵候補の集会在「出陣式」によるものであることを付け加えるならば、「ムラの選挙」における一触即発の雰囲気は伝わってくる。

5 選挙結果・選挙違反・新市長の動向——市長選の終焉と再生——

投票日は、当落の明暗を際立たせるとともに違反者の摘発が開始する時でもある。選挙違反は、「秋霜烈日」の取締りよりも「情状酌量」が制度としての「選挙」を円滑に作動させる。開票直後の違反者の摘発は、選挙活動に伴う「老廃物」の除去となり、選挙そのものの純化をもたらす。このとき、摘発そのものが選挙の公正な姿勢をあらわし、「情状酌量」と違反者の「とかげのシッポ切り」が組み合わさって、作用する。このため、連座制といえども要人にまで係累が及ぶことはあまりなく、かえって違反者は殉教者として意味づけられることもある。ところが、今回の選挙は事情が少し異なっていた。選挙の公明正大さを人々に再確認させる「出直し／やりなおし選挙」であり、投票方法の管理を超えたシステムそのものの価値を問う契機となりうる選挙であったからである。制度は、それが属する社会の価値を反映するものならば、「制度のやりなおし」は当該共同体の価値が問われることになるはずである。確かに各紙の写真も、選挙違反が市の助役によってなされたことの重要性を認識したものになっている。A、Y、Hcは同一面で

(図-9) '96. 7. 30 北陸中日新聞朝刊



反原発市議 5 人が欠席する中、就任あいさつをする貝蔵治市長
＝珠洲市議会議場で

「当選した貝蔵候補の胴上げ」と「助役の違反(事情聴取・逮捕)」の写真を併記している。ここにおいて二枚の写真による「モニタージュ」の技法による組合せの効果を狙っているのは、違反の重要性を認識した結果とみられる。「胴上げ」と「証拠押収の箱詰め/持ち出し」・「事情聴取への出頭」などの「決まり文句」(的構図)が、逮捕の現実の大きさを象徴する。

しかしながら、助役逮捕の衝撃は(図-9)にみるような、原発反対派欠席のまま開催された珠洲市議会のように問題点を持ちつつも終息に向かっていく。「選挙無効」から始まった市長選挙の儀礼的過程は「死と再生」という形を取りつつ日常に回帰したのである。

6 二〇〇〇年珠洲市長選挙

——問題の相対化——

珠洲の市長選で長年の争点となっていた、関西、中部、北陸の電力三社による原子力発電所(原発)立地計画問題は、九六年選挙で当選した原発「推進

派」の現職員蔵治氏が、計画「凍結」を掲げる泉谷満（いずみや みつる）氏を破って当選した。貝蔵氏の主張する過疎化、高齢化の解消として、原発設置をとという言説が構造的な不況の状況を反映して、有権者の指示を得た。これに対して、原発を巡る推進、反対の対立は不毛であるとする泉谷氏の主張がある程度支持を得たことは、九六年の選挙がどのようにカテゴライズされたのか興味深い点がある。経済状況に原発反対が屈したとみるよりも、原発反対、推進相互を相対化しようとする候補の登場は、結果的に推進派に有利に作用したとはいえ、推進・反対の双方にその正当性の剝奪を予感させる点で重要だったのではないかと思われる。言い換えれば、こうした「相対主義」を資源とする「政治」が新たに始まるということがいえよう。

四 結論と課題

新聞社が主催ないし協賛した世論（電話）調査が、この時期に計六回行なわれてくる（Hk: 6/14, 7/11, Hc: 6/1, 6/27, 7/11, A: 7/4）。これらの調査から今回の珠洲市長選挙の争点を見ると、（Hc 6/27）のみに争点の質問項目があり、①原発、②過疎対策・地域活性化、③高齢者対策、④生活基盤整備、⑤産業振興、⑥福祉、となっている。これ以外に「候補者の選択での基準」を問うている調査が四回（Hk 7/11, Hc 6/27, 7/11, A 7/4）あり、そこでは三回の調査で「政策」が首位となり、「原発」と「人柄」で二、三位を分け合っている。また、無効選挙の扱いに対しては、投票の動機と位置づけたり、関心の有無を特別に聞いたり、様々な対応をしていた。これらから、原発問題や最高裁判決は選挙の（投票に向かうことへの）刺激ではあるが、実際の選択にはあまり影響を与えていないことがわかる。前章で考察した写真が描く「珠洲市長選挙」は、立候補―運動―投票という「選挙」一般の儀礼的手続きに「選挙」そのものの可否を問う問題が提起された点で、きわめて動的な色彩をもつ儀式となった。しかし、世論調査結果からみると写真が提示した刺激はあくまで投票所に足を運ぶところまでであって、実際の選択については「別の枠組み」

が作動したと考えられる。いいかえれば、新聞写真というメディアが提示した「珠洲市長選挙」といった「儀式」は、有権者の既存の価値判断や枠組みを補強するという「限定効果」を提供したといえる。

本稿ではつとめて、写真メディアから得られる情報に限りて考察を進めたが、今後は記事および「論調部分」(コラム・社説・投書)との関連から検討する必要がある。その試みはいくつかの分野でなされている。写真とテキストが読み手の争点認知に影響を及ぼすとする研究が実験状況において明らかになっている(Gibson, & Zillmann, 2000)。もっとも、従来の研究では、写真はあくまでテキストの補助的役割としてのみ検証されてはいない(Wanta, 1988)。新聞メディアはテキストと画像の総合的な存在であることを再確認しておく必要があるだろう。

文献

- Berger, A. A. 1991 *Media Analysis Techniques*, London: Sage.
- Bishop, R. 1999 "From behind the walls: boundary work by news organizations in their coverage of Princess Diana's death," *Journal of Communication Inquiry* 23(1): 90-112.
- Brauer, L. and Shields, V. R. 1999 "Princess Diana's celebrity in freeze-frame: reading the constructed image of Diana through photographs," *European Journal of Cultural Studies* 2(1): 5-25.
- Brennen, B. 1998 "Strategic competition and the photographer's work: photo-journalism in Gannett newspapers, 1937-1947," *American Journalism* 15(2): 59-77.
- Burke, Kenneth 1945 *A Grammar of Motives*, New York: Prentice-Hall, Inc. 森常治(訳)『動機の文法』晶文社 一九八二。
- Edelman, M. 1964 *The Symbolic Uses of Politics*, Urbana, Chicago, and London: University of Illinois.
- Edelman, M. 1995 *From Art to Politics*, Chicago and London: The University of Chicago Press.
- Edge, S. 1999 "Why did they kill Barney? Media, Northern Ireland, the riddle of loyalist terror," *European Journal of Communication* 14(1): 91-116.

- Ellis, J. 1998 *Silent witnesses : representations of working-class women in the United States*, Bowling Green, OH : Bowling Green University Popular Press
- Fiske, J. 1991 *Introduction to Communication Studies*, 2nd London : Routledge.
- Gibson, R. and Dolt Zilmann. 2000 "Reading between the Photographs: The influence of incidental pictorial information on issue perception," *Journalism and Mass Communication Quarterly* 77(2), 355-366.
- Gombrich, E. H. 1960 *Art and Illusion : A study in the psychology of pictorial representation*. Princeton, NJ : Princeton University Press. 藤田 義久 訳 『芸術への幻滅』 岩崎美術社 一九七〇年。
- Gombrich, E. H. 1972 *Symbolic Images : Studies in the art of the Renaissance II*, Oxford : Phaidon Press. 大原 孝 訳、鈴木 敏十、渡山 公一 訳 『シンボリック・イメージ』 平凡社 一九九一年。
- Hackett, R. A. 1985 "Decline of a Paradigm? Bias and Objectivity IN News Media Studies," In M. Gurevitch and M. R. Levy(eds) *Mass Communication Review Yearbook*, London Sage, pp.251-74.
- Halloran, J. D., Elliott, P. and G. Murdock 1970 *Demonstrations and Communication*. Harmondsworth, Penguin.
- Hansen, A. and G. Murdock 1985 "Constructing the Crowd: populist discourse and press presentation," In V. Mosco and J. Wasko(eds) *Popular Culture and Media Events*, Vol.III, Norwood NJ : Ablex' pp.227-57.
- Hartley, J. 1982 *Understanding news*, New York : Methuen.
- Lee, E. 1998 "The effects of delay on the performance of computerized feature systems for identifying suspects," *Behaviour & Information Technology* 17(5) : 294-300.
- McDaniel, J. P. 1998 "More than meets the eye: an expose on patriotic libido and judgement at the lebel of the image in American war culture," in Sloop, J. M. and McDaniel, J., (eds), *Judgement calls : rhetoric, politics, and indeterminacy*. Boulder CO : Westview Press, pp.102-160.
- Messaris, P. 1994 *Visual literacy : Image, mind, reality*. Boulder, CO : Westview.
- 名取 洋之助 一九六二 『写真の読み方』 岩波書店
- 三輪 和雄 一九九六 『病める政治家たち——病氣と政治家と権力——』 文芸春秋

パノフスキー・E 一九七一 中森義宗・内藤秀雄・清水忠(訳)『視覚芸術の意味』岩崎美術社。

Russial, J. and Wanta, W. 1998 "Digital imaging skills and the hiring and training of photojournalists," *Journalism & Mass Communication Quarterly* 75(3): 593-605.

坂本孝治郎 一九八九 『象徴天皇制へのパフォーマンス』山川出版社。

佐々木孝夫 一九九八 『地方紙・全国紙地域版の選挙報道に関する内容分析』(『平成法政研究』第二巻 第二号 二〇五―二二六頁。
Smith, C. Z. and Woodward, A. M. 1999 "Photo-elicitation method gives voice and re-actions of subjects," *Journalism & Mass Communication Quarterly* 53(4): 31-41.

武重雅文 一九九七 『新選挙制度下の総選挙における選挙報道』一九九七年度日本政治学会研究会報告論文。

Tuchman, G. 1978 *Making the News: A study In the construction of reality*, New York: The Free Press.

Turner, G. 1988 *Film as Social Practice*, London: Routledge.

吉見俊哉 一九九四 『情報化時代の儀礼秩序——メディア・イベント研究序説——』東京大学社会情報研究所(編)『社会情報と情報環境』東京大学出版会 pp.442-470.

Waldman, P. and Devitt, J. 1998 "Newspaper photographs and the 1996 presidential election: the question of bias," *Journalism & Mass Communication Quarterly* 75(2): 302-311.

Wanta, Wayne 1988 "The Effect of Dominant Photographs: an agenda setting experiment," *Journalism Quarterly* 65, 107-111.

White, D. M. 1950 "The Gate — Keeper: A case study In the selection of news," *Journalism Quarterly* 27, 383-390.

渡辺 勉 一九六八 『写真・表現と技法』タワインド社